

「人と仏」

堤日出雄 先生

NHKラジオ第二放送「宗教の時間」

平成十九年八月二十六日放送

聞き手は金光寿郎さん

(放送分に加筆)

金光：お釈迦様の時代とか、親鸞聖人の時代に比べますと、飛行機も飛ぶようになりましたし、新幹線も走るようになりましたし、テレビなんかもできて、現代の人間のほうが科学的な知識のほうはずいぶん発達していると思いますが、人間そのものについては、堤先生は、現代の人間と昔の人間と比べて、どういふふうな感想をお持ちですか。

堤：そうですね。現代の人間も、人間そのものはお釈迦様時代と変わりませんけれども、特に現代は自我意識が非常に強くなっていると思います。自分の自我意識に執られる、これは我執といえますけれども、現代人はその我執のために非常に苦しんでいるという面が強く激しくなっているという気がいたします。

金光：むしろそういう面では科学技術の力で便利さを発達させているために、我執が強くなっている。

堤：そうですね。生活が大変便利になって、何でもボタン一つで自分の思い通りにできることが増えてまいりました。そうすると、あれもこれも私の思い通りになるはずという意識が強くなって、一寸自分の思い通りにならないことが出てくると、もうそれを受けとれない。受け止めきれない。そのためにいろいろとストレスがたまり、イライラして苦しむ、あるいは悩んで落ち込んでいくといったことが大変多くなりましたね。

金光：仏法では、そういう人間というものを、ことに先生が今仰った我執が強い現代人のあり方のようなものを、どういふふうにみていらっしゃるのですか。

堤：私など若い時からいろいろご縁があつて仏教のお話をお聞きしてきたのですが、やはり人間というものはどんな人も凡夫であると言うことですね。これが一番基本的な仏教の人間の見方だと思います。

凡夫といえますと、何か平々凡々として、罪のない愛すべき存在というイメージがありますけれども、実はこれは「煩惱具足の凡夫」という、あらゆる煩惱を身に具えた凡夫ということをいうわけです。これは経典の中に、『観無量寿経』とか『涅槃経』等にはつきり出ております。

ですから、凡夫というような言葉も、人間私が自分で考えて気がついた、見出したというものでなくて、むしろ仏のほうが明らかに、人間の本当の姿、正体を見抜いた、看破した、そういう言葉ですね。

その凡夫の正体について、私が最近いちばん共鳴を覚えているのは、阿弥陀仏の本願が説かれている『無量寿経』というお経の中の第一願の言葉です。ご承知のように四十八願という四十八の願が並べられているわけですが、その第一願、これが本願の出発点ですね。この第一願はどのような内容かといいますと、「たとい私が仏になるとしても、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ」、つまり、地獄・餓鬼・畜生のような世界、そういう存在がない国、浄土を作りたいと、こういう仏の願いです。ということは、裏からいえば人間は、地獄・餓鬼・畜生のような世界を作っていく存在であるところいうことですね。これが仏の眼にうつったありのままの人間の姿です。

とくに地獄という言葉ですね。地獄というのは、怨み、憎しみという激しい対立感情に縛られて、全く自由を失った苦しみというふうにいわれます。これはまさに今日の我々の現状ではないでしょうか。大きく言えば戦争やテロの続発、家族にあつては親が子を殺し、子が親を殺すといった悲劇が後を絶たない。地獄は死んでから先にあるという話ではなくて、まさに今、人間は地獄を作っているのではないかと。それは私には関係がないだろうか。私の中にも全く同じ地獄を作っていく因がある。それが煩惱具足の凡夫という問題なのです。そのことがはつきりと本願の第一願に出ているわけです。

本願の最初にこのような言葉があるということは、そういう地獄を作っていくような強い我執の煩惱を抱えた存在が、仏の本願の中にしつかりと位置づけられているということです。つまりこのような救いがたい存在が仏によって悲しまれ、願われているということです。このことをしつかりと受け止めたと思います。

金光：現代では、自己を確立しなさいとか、もつと自分を主張しなさいと。西欧の人に比べると日本人というのは自己主張が弱いとか、主体性がないとか言われますけれども。そういう自分というものについてはどういうふうに考えていけばよいのでしょうか。

堤：そうですね。先ほどの凡夫とはどういう存在か、煩惱具足の凡夫の内容を見事に言いあてた言葉が唯識仏教の入門書の中にありました。それは次のような言葉です。

「人間は自分という牢獄の中に閉じ込められた囚人である」と。非常に鋭い人間の本質を言い当てた言葉ですね。自分という牢獄、つまり自分の執われ、自我の我執が私を閉じ込める牢獄になつていくというのです。私は自我の厚い殻の中に入つていて自分で出ることが出来ない。

それが、たとえば今日でいいますと、劣等感であったり、いろんなウツの状態、閉じこもり（引きこもり）など、みな当てはまると思うのですけれども、広くいえばどんな人も自分の主観的な思いでこしらえた自分を、私はこういう人間だというふ

うに決めつけてしまつて、そこから出られない状態です。自分の思いを超えることが出来ない。そうすると私たちはこの我執の殻から出ない限り、自己の確立は出来ないわけですね。

金光：自分をわかつているつもりでいながら、それが牢獄であるということなのです。ではその牢獄であるということに気づくには、どういうふうになればよろしいのでしょうか。

堤：そうですね。それが非常に大事なところだと思います。やはり我々人間は、自分の本来の姿を自分で見ることができない。それはたとえていえば、ここにすばらしい性能を持ったカメラがあり、どんなものでも写すことができたとしても、カメラがカメラそれ自体を写すことは出来ないというようなものです。これと同様に私たちは、自分自身が、自分でありながらも全く見えない。見ることが出来ないのです。

そうすると、自分を見るためには、鏡が要するというになります。人間私の本来の姿を映し出す鏡、それが仏の教えです。キヨウというと、お経、経典の経ですが、それが同時に教え、教でもあるわけです。したがって昔から、「経(教)は鏡なり」といいます。仏の教えは深い悟りの智慧にもとづいていますから、どんな私でも明らかに照らし出すことが出来る。その仏の教えを聞く、仏の教えを学ぶということによって初めて、私たちは、私の現実の姿、自分では見れない気づかない私の正体、愚かでお粗末な凡夫である私を知ることが出来る。これ以外に道がないのではないのでしょうか。

金光：でも、その鏡に映る自分というのは、少しはマシなところも見えてくる、というふうなことはないのですか。

堤：そうですね。一般的には確かにそうなのですけれども、やはり今申しましたように、仏法は仏陀の悟った法であつて、一切の我執を全くこえ離れた無我の智慧なのです。それに対して人間は徹底して我執を持つている存在なのです。これは全く対照的です。一切無我なる仏の悟りの法が、我々自我の我執の塊である人間を明らかに照らし出して、この我執こそあらゆる人間の迷い・苦しみの生まれてくる根源であることを指摘した。教えのほう、仏のほう、人間の愚かさの根源を指摘しているのです。これは非常に大事だと思います。

金光：その教えに照らしてみますと、自分が我執という牢獄の中に閉じ込められているということにも気づかせていただけるといふことでしょうか。

堤：はい。これは、その我執の殻から解放される、殻が破られるというふうになりますけれども、それは殻がなくなるとか、あるいは煩惱がなくなるといふふうには言えないのです。それはどういふことかと申しますと、どこまでもそういう自我の殻を持つて、その中に自分が自分を閉じ込めているという、そういう自分をいよいよ明らかに知らされていく。それが、煩惱

具足の凡夫である、そういうわが身であるという、これが目覚めなのです。

深い目覚めが私の中に成り立っていく。そこに、その目覚めが徹底することによって、殻を超えた広い大きな仏の世界に出遇っていきける。こういうふうな道筋と申しますか、心の転回があるのですね。

金光：その場合に、自分の煩惱、自分でも感心しないような、そういう自分の姿に気がつく、落ち込んでしまうということにはならないのですか。

堤：そうですね、その点が非常に大事なところで、私が自分の力で自分で反省して気づいた自分ならば、これは受け取れなくて、落ち込んでいくしかないような、場合によっては、それこそ自殺することになるかもしれません。けれども今申しましたように、このような自分は仏の智慧よって初めて明らかにされた私の本当のすがたです。ということ、これは法の働きと申しますけれども、仏の智慧・仏の法は、そのような人間の、自我の煩惱の中に閉じこもっている愚かなお粗末な姿を見出して、そのような人間のあり方に対して、深い慈悲の心を起こしたということ、そのような痛ましい人間のあり方を、仏は自らの中に受け取って、そういう人間を救わずにはおれないという強い願いが仏の方に起こるので、仏の智慧は慈悲と一つになっているのです。

したがって、そういうお粗末な私に気づかされたとしても、それは仏の智慧によって気づかされたということですから、そういう私を知らせたのは仏の智慧、つまり仏の光なのだ。そこに直ちに仏の智慧を、仏の光を仰ぎみることができ。そういう形で、むしろ、そういう自分を知らされたことが、自分を超えた大きな仏の世界に逆に心が開かれる。こういうふうにいえるわけです。

金光：救われるという言葉を使いますが、これはお話の世界が、仏法によって救われる世界になるわけでしょうか。

堤：はい、だいたい基本的にはそういうふうに申しあげていいかと思うのです。まず仏の教えによって私の自我の厚い殻を照らし出されて、これが私だということを徹底的に自覚せしめられる。そのことを通して、殻を超えた大きな広い真実の世界に連れ出される。小さな狭い自我の世界から解放される。これが仏教、あるいは仏法における救いの基本的な内容でございます。

金光：では、気づくと、気づいたところで、お金が天から降ってくるわけでもございませんし、棚から牡丹餅が落ちるわけでもないわけですが、気づくとどういいう世界が展開するわけですか。

堤：…そうですね。そういう自分のお粗末な愚かな姿にはつきりと目が覚める。そうすると、今申しましたように、それはそのような私を知らせてくれた仏の働き、仏法に生かされることであると。そうなるはず、具体的に、自分のありのままの現実を受けとめていけるといって、智慧が与えられるのです。

これが大切なことで、救いを別の面からいって、どのような現実もそのままに受け止められる自分になるということです。私達は自分のありのままの現実を受け止めることが出来ないために苦しまなければならぬ。どうして私がかんな目に遭わなければならぬのか、どうして私かという、私にとって都合の悪い、不本意なことに出くわすと、本当に人間はそれを受け止められないのです。次々と愚痴の思いが吹き出して、人を憎んだり、世の中を怨んだり、そういう愚痴や怒りのところが私を占領してしまって、顔は暗く、生きる意欲も失ってしまうということになる。

けれども、それをわが身の本当の姿を明らかに照らされて、愚かな私であるというところに目が覚めてみると、どのような現実も、そのままにこれが私の現実と受けとめる。やたらにその現実と対立して、怨んだり憎んだりするのではなく、逃避するのでもなく、もちろん諦めるのでもない。その現実を受けとめるということは、その中に深い意味を見出すということでしょう。

その現実を通してそこから学ぶものがある。教えられるものがある。その現実がなかったら、私は自分の愚かさに気がつき、私を超えた大きな世界があることを知ることが出来なかつ

たかもしれない。つまりその厳しい現実が、私が仏の教えを学ぶためのかけがえのない縁、手がかりになる。もしそのように受け止められるとすれば、顔が明るくなり、その現実とともに生きてゆく意欲がわいてきますね。

受けとめるというところに、今申しましたように、その厳しい現実が私の新しく立ち上がっていくための出発点になっていく。それほどの意味を見出していける。仏法によつて救われるとは、こういう事実が成り立つということではないでしょうか。

金光：…そうすると、その気づかせていただいた、自分はこういう大きな真理の中で生かされているということに気がつきますと、仮に困った状況があるとすると、状況自体がガラリと変わるわけではないのですね。

堤：…そうですね。困った状況、私を苦しめる問題は、色々な条件が寄り集まって起きているわけですから、どんなに努力してもそう簡単には変わらない。なくならない。それならもう生きていてもつまらないというのではなく、その現実を私のため仏道の内容として見開いていく智慧が与えられると、状況は全く変わらなくても、その中を自分を失うことなく、悠々と生き抜いていけるのですね。私の生きる世界が底抜けに大きくなるのです。

金光：…その苦しみ自体はどうなるのでしょうか。

堤：仏の教え、仏法のはたらきとして、物事を転ずるといふことがよくいわれます。これは仏の智慧のはたらきですね。転悪成徳、悪を転じて徳と成すという。悪とは、煩惱のために苦しんでいくという現実、あるいは失敗したりして世間から冷たい目で見られるといった惨めな体験ということもありましようけれども、そのような苦しみがそのまま続くのではなく、それが仏の智慧によって転ぜられていく。ただ私を苦しめるものにとどまらない。苦とか悪といわれるものとはともすれば私のこころを暗くし、閉ざしていくのですが、このような苦しみや悪が転ぜられると、先にも申しましたように、それが私の道の内容になり、大きな世界を知らせるものになるのですから、かえって私の閉ざされた心を開くはたらきをするようになるのですね。

金光：そうなりますと、煩惱具足の凡夫である、自分の煩惱もまた、煩惱に対する自分の姿勢といえますか、迎え方も変わりますね。

堤：そうですね。そういう意味では、煩惱あつてこそ仏のころというか、本願のまことを知らされる。阿弥陀の本願は、このようなお粗末な煩惱を抱えて苦しんでいる私のために、起こされていたのだ。こういうふうにとつて受け取っていくわけです。

これは親鸞聖人の語録である『歎異抄』の第九章に出る言葉なのですけれども、「他力の悲願は、かくの如きのわれらがためなりけり」、かくの如きの、このような愚かでお粗末な、煩惱をいっぱい抱えて苦しむ私のために阿弥陀の本願はおこされていのだ。仏はこの私のために立ち上がって、ご苦労下さつていたのだというふうには、その煩惱を縁として、仏の本願の世界に、大悲の世界に帰つていける。そこに、煩惱はなくならないけれども、その煩惱すらも、私の仏法の学びの場、道場にしていけると。

金光：お聞きすると、仏さまの本願と、仏さまという言葉が出ているわけですけども、どこかに仏さまという方がいらつしゃつて、たとえば堤先生という人に、こうしてやろうとか、ああしてやろうとか、何か目当てとしていろんなことをなさつていふというふうには、受け取りがちなのですけども。仏さまを拜んで、何々してくださいというような形としての拜み方というのものもあるようですけれども、どうもそういう形の仏さまではないような。

堤：そうですね。なかなか正しく仏そのもの、仏さまといわれる存在を理解するということが難しいですね。何か、仏さまというのと、人間の姿かたちをした仏像として拜む対象というイメージがありますね。しかし、仏教では、正しくは、仏さまのことを仏（ブツ）、あるいは仏陀（ブツダ）といつて、仏陀というのはサンスクリット語ですね。これはご承知のように、法

(ダルマ 真理)に目覚めた者という意味なのです。その限り仏はお釈迦さまのような人なのですが、ただ、仏をして、目覚めさせた法そのもの、生きた法と申しますか、その法をも阿弥陀仏といいまして、仏、仏さまと言いますからややこしいのです。

阿弥陀仏は、仏いいましても人ではなく、阿弥陀なる法なのです。真理そのものを表しているのです。人間の姿かたちをしたようなそういう存在ではなくて、あらゆる存在を根源から成り立たせ生かしているような生きた法、真理のことですね。それは、我々の深い自我の煩悩、深い執われ、我執の暗闇を照らす光の働きをするので光明と呼ばれるのですね。どこまでも仏教は、仏の目覚めた法、仏が明らかにした法によって救われるのです。真理・法によって救われる。これが一番基本になっているでしょう。

金光：阿弥陀の場合は、阿弥陀如来という、如来という言葉がつく場合がありますね。如から来て、如に去っていくという。如というのは、今展開している、今のこの世界そのものを如というようにも受けとれるかと思いますが、やはり今仰っていることは、阿弥陀さんというのは如来さんであると。姿は見えないにしても、どこかに一人いらつしやって何とか、というようなことではなくて、働きそのものということが。

堤：阿弥陀さんといえは何か目に見える人格的なものという気がしますが、おつしやるように、目には見えないけれどもは

たらきですね。あらゆるものをあるがままに生かしている、成り立たせている、そういう法。それをまた一如、如といいます。我々は、自分の努力で、一生懸命努力して、その如の世界に至る、如の世界を悟ることができるか。これはできるというふうに考えていらつしやる方もありますけれども、親鸞聖人の宗教つまり、本願の仏道では、自分の力、自分の努力によって、如なる世界を悟るということはできない、それは人間の限界であるところのように申します。そうすると残された道は、如なる真理そのもの、法そのものが人間の世界に現れるという、それが「如・来」なのです。それが具体的には本願となり、さらに名号と申しますが、「南無阿弥陀仏」となるのです。だからこれは、真理そのものが人間の現実に応じて現れてくる、その法に出遇っていくという、これが本願の仏道の基本になってきます。

金光：その法と、如来さんと、仏さんと人間との関係を、今説明していただいたと思うのですけれども。そうしますと、人間が、人間によつては、人間同士では、「救いの世界にちよつと連れて行ってください」というわけにはいかないわけですね。

堤：どこまでも如といわれるような法の世界、悟られた法の世界は、人を超えている。その人を超えた法に、われわれが直ちにに出遇うことはできないのです。如から来たるといいたけれども、それは自分の努力によつて如来なる存在、法の働きに出遇うことはできないわけです。

ではどうすればよいかというと、すでに如来なる法に出遇った人、これは具体的には本願といいますが、その本願に出遇って仏の本願に救われた人、そういう人に出会う。人に出会って、その人を通して、人を超えた本願の法の世界に新しく出会って行く。こういうふうな道筋になるのですね。

ですから、すでに法に出遇って、法を頂いている人を通して、法の働きをどこまでも聞いていく、教えとして聞いていくのです。これは聞法といえます。これを尽くしていかないと、なかなか私たちは生きた法(本願)と出遇い、本願に生かされるという事になりません。

金光：その際の聞く態度ですけれども、ここで非常に難しい問題として、我執に固まった自分だということを最初に仰いましてたけれども、我執に固まった自分ということを教えていただいた場合に、では、もう自分の判断は一切捨てて、もうすべてお任せしてしまふ。自分とその人を通して、法に近づく場合の、自分の姿勢というのはどういうふうに考えたらよいですか。

堤：そうですね。そこは大事なところだと思いますけれども、中々難しいですね。何度も申しますように、私自身は自我の、我執の煩惱によって厚く覆われているわけです。そのような私が人を通して法と出遇い、法の働きを教えとして聞き続けていくためには、どこまでも法に照らされて歩む求道の主体がなくはなりません。そうでないと、おっしゃるように法を説く人(善知識)にベッタリ依存するか、すべて法の働きにおまかせ

して私は眠ったようになってしまふ。それは仏法によって救われた姿ではありません。

仏法によって救われるとは、厳しい人生の只中を、仏法を深い抛りどころにして限りなく歩む、助かったとしても決してそこに停滞しないで、最後の最後まで仏道をあゆみ続ける人になる、つまり独立者になることでしょう。しかしそんな主体は始めからはないわけで、仏法のはたらきをこうむって、自我の我執の厚い殻が破られ、融かされていくことによって、そこに本當の主体というか、本来の私が誕生してくるのですね。そういう言い方ができるのではないかと思えます。

金光：その場合も、仏法を聞いて、どこかで本来の自分みたいな、無色透明みないな、その我執の殻がだんだんと破られてくると、何かそういう純粹なきれいな自分に気がつくことができ、そういうところで悠々と生きていけるといふような、そういう世界に行くわけでしょうか。

堤：そのところは、どんなに仏法を聞いても煩惱具足のわが身は変わらないわけですから、我執の殻のすつかり取れた純粹というか、理想的な自分になるということではありません。やはり、出会う縁によってはどんな煩惱も出てきて、どんなお粗末なことを仕出かすかわかりません。けれどもその煩惱の身をいよいよ仏の光に照らされて、これが私と仏の前に頭を下げて懺悔していく。この懺悔が大変大事なのです。

この懺悔のところに深い感謝というか、讃嘆がある。懺悔と同時に、このような私を照らし出し既に生かしているような、真実・法の世界がある。その法の世界を本当に仰いで讃嘆していく。懺悔と讃嘆、あるいは感謝。これは全く一つなのです。先にも触れましたように、阿弥陀の本願はこのようなどうしようもない私のために起こされたのか、申し訳ない、もったいなさうという深い感動の心です。こういう心が必ず私の中に起こってくるのです。そのような深い懺悔と讃嘆の成立こそ、仏法に救われた証明といっても過言ではありません。

金光：そうになると、○か×か、善いか悪いかと、二者択一のこと。ちらかが正しいか正しくないかという、そういう分け方で訓練されてきていますけれども、「煩惱に目覚めて、煩惱がいつぱいだった。じゃあ、そつちはやめた。」という、だんだんきれいな世界に入れるのか、というようなことを頭では考えがちなのですけれども、生きた人間としては、その煩惱の根が切られてしまうわけではないのです。やはり湧いてはくるわけですね。

堤：そうですね。煩惱は棺おけの蓋が閉まるまでなくならないという、これが本願の仏道の根本なのです。そうすると今仰ったように、煩惱の意味が変わるわけです。仏法に出遇う、本願に出遇うことによって、その煩惱すらも、仏の働き、仏法の真実、本願のはたらきを証明するものになるわけです。

だから煩惱をとってしまつたら、かえって私の上において仏法が明らかにならない。そこまで煩惱の中に大きな意味を見出していくという、こういうことになるでしょうか。

金光：そこまでいくと、煩惱の執われからはもう抜けたというか、受け止めたということでしょうか。

堤：そうですね。受け止めたのです。だから煩惱はあるけれども、それが私を苦しめる障りにはならないのです。煩惱を抱えている限りは、やはり縁によつては、「さるべき業縁のもおせば」という言葉がありますように、実際にどういことが出てくるかわからないのですけれども、たとえ出て来たとしても、その煩惱の現実をしっかりと受け止めていける新しい私が生まれているということになります。

金光：こういう話を聞いた人は、そういうところまで気づかせていただけると、もう悪いことは自分にはおきないのか。阿弥陀さんは自分にはいいことばかりくださるのだと。病氣にもならないし、あまり貧乏にもならないし、そういう世界をいただけるのかと思う人がおられるかもしれませんが、そのへんはどうですか。

堤：それは全く違つておりまして、我々の現実とは結局いろんな条件、縁によつて引き起こされるわけですから、これを縁起の道理といえますけれども、たとえばお願いしたりするにしても、

地震はおこるし、病気にはなるし、これは避けられないわけですね。

ですから、くり返し申しますように、その現実を深々と受けとめていける智慧をいただく以外にないのです。その現実を通して、私の本当の道が明らかになる。その内容として、その現実を逃げないで受け止めていくという。そこに大きな意味があるのです。

金光：やはりそのように気づかせていただけると、たとえば同じような事件が人間に降りかかってきても、そういう法の世界を聞いていないときの受け止め方とは、これは全く変わってきますね。

堤：そうですね。変わってきますね。私たちは、本当は私の与えられた命いっぱい生きていきたいけれども、常に自我の煩惱が妨げていくのですね。煩惱のことを「内なる妨害者」といった人がありますけれども、まさに命の生きた働きを、私の自我の煩惱が妨げている。たとえば他人と比べて、私は人生落伍者だ、負け組みだ、こんな自分は生きる甲斐もないと思うと、もう生ける屍のようなものです。いのちの不完全燃焼ですね。

煩惱はなくなりほしなくても、煩惱を超えていけるといふ視点を仏の智慧によって与えられると、その命の働きを妨げるような煩惱の働きが、仏の智慧によって破られていく、翻されていく。無理に背伸びをしたり、表を飾る必要もなく、本来にありのままの自分を、自分になりきって、坦々と、しかし生

き生きと命いっぱい生きていける。こういう私が新たに誕生するのです。そういうことができるかと思えます。

金光：そうなつてくると、煩惱を目の敵にする必要もなくなっていくわけですね。

堤：ある方が「煩惱様」と仰つて、敬称をつけて呼んでおられました。本当にそうなのです。

金光：そういう世界に気づかせていただききたいものだなと思いつながらお話を伺いました。どうもありがとうございました。

堤：どうもありがとうございました。(終わり)